

経路空間上のベクトル場について

廣 島 勉

1 イン트로ダクション： \mathbb{R}^n 上の熱方程式

\mathbb{R}^n 上の熱方程式の基本解による解

$$\mathcal{H}_t f(x) = \int_{\mathbb{R}^n} f(y) e^{-\frac{|x-y|^2}{2t}} \frac{dy}{\sqrt{(\pi t)^n}}$$

において、 $v = \frac{y-x}{\sqrt{t}}$ の変数変換をする。

$$\mathcal{H}_t f(x) = \int_{\mathbb{R}^n} f(x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}}$$

これを、 t で微分し、

$$\frac{\partial}{\partial t} (\mathcal{H}_t f(x)) = \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \partial_i f(x + \sqrt{t}v) \frac{v_i}{2\sqrt{t}} e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}}$$

$\frac{\partial}{\partial v_i} \left(e^{-\frac{|v|^2}{2}} \right) = -v_i e^{-\frac{|v|^2}{2}}$ を用いて、部分積分すると、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial t} (\mathcal{H}_t f(x)) &= -\frac{1}{2\sqrt{t}} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial f}{\partial x_i} (x + \sqrt{t}v) v_i e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= -\frac{1}{2\sqrt{t}} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial}{\partial v_i} \left(\frac{\partial f}{\partial x_i} (x + \sqrt{t}v) \right) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= \frac{1}{2} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial^2 f}{\partial x_i^2} (x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= -\frac{1}{2} \int_{\mathbb{R}^n} \Delta f(x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \end{aligned} \tag{1}$$

を得る。

同様の部分積分が経路積分で可能であるとして、(1)でのベクトル場 $\sum_i v_i \frac{\partial}{\partial v_i}$ にあたるものが、リーマン多様体上の経路積分で何であるのかを考察したい。

2 リーマン多様体の H^1 級曲線

(M, g) を、連結で、向き付けられ、境界を持たない、 n 次元完備リーマン多様体とする。リーマン計量 g から誘導される (M, g) の主 $SO(n)$ 束を $O(M)$ とし、 $O(M)$ 上の標準1次微分形式を θ 、リーマン多様体 (M, g) の Levi-Civita 接続から定まる $O(M)$ 上の接続形式を ω とする。

主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の曲線 $\hat{\gamma} : [0, 1] \ni s \mapsto \hat{\gamma}(s) \in O(M)$ が H^1 級の曲線であるとは、 $\hat{\gamma}$ の接ベクトル $\frac{d\hat{\gamma}}{ds}$ が $O(M)$ の標準的な接枠で L^2 級であること、すなわち、

$$\omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) : [0, 1] \rightarrow \mathfrak{o}(n)$$

と

$$\theta\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) : [0, 1] \rightarrow \mathbb{R}^n$$

が区間 $[0, 1]$ 上で L^2 級関数であることとする。

主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の H^1 級曲線 $\hat{\gamma} : [0, 1] \ni s \mapsto \hat{\gamma}(s) \in O(M)$ が水平であるとは、 L^2 級関数として、

$$\omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) = 0$$

となることとする。

リーマン多様体 (M, g) 上の曲線 $\gamma : [0, 1] \ni s \mapsto \gamma(s) \in M$ が H^1 級の曲線であるとは、主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の H^1 級の水平な曲線 $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$ で、 γ の持ち上げになっているものが存在すること、すなわち $O(M)$ から底空間 M への射影を π とするとき、

$$\pi(\hat{\gamma}(s)) = \gamma(s)$$

となる主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の H^1 級の水平な曲線 $\hat{\gamma}$ が存在することとする。

このような水平持ち上げは、存在するとすれば、起点 $p_0 \in \pi^{-1}(x_0) \subset O(M)$ ($x_0 = \gamma(0) \in M$) の選び方を除いて、一意的に定まる。

定理 2.1. $\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ と起点 $p_0 \in O(M)$ が与えられたとき、

$$\begin{aligned} \omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) &= 0, \\ \theta\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) &= \xi, \\ \hat{\gamma}(0) &= p_0 \end{aligned} \tag{2}$$

となる曲線 $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$ が一意的に存在する。

証明. 主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の局所自明化を与えるような座標近傍 (U, ϕ) を $\phi = (x, a) : U \rightarrow \mathbb{R}^n \times \mathfrak{o}(n)$ とする。この座標近傍内で $O(M)$ の曲線 $\hat{\gamma}$ の接ベクトルは

$$\frac{d\hat{\gamma}}{ds} = \frac{d(x \circ \hat{\gamma})}{ds} + \frac{d(a \circ \hat{\gamma})}{ds}$$

と表される。第2の成分は $O(M)$ の垂直成分であり、微分方程式(2)は、

$$\begin{aligned}\theta_i\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) &= \sum_j \theta_i\left(\frac{\partial}{\partial x_j}\right) \frac{d(x_j \circ \hat{y})}{ds} = \xi, \\ \omega_{ij}\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) &= \sum_k \omega_{ij}\left(\frac{\partial}{\partial x_k}\right) \frac{d(x_k \circ \hat{y})}{ds} + \frac{d(a_{ij} \circ \hat{y})}{ds} = 0\end{aligned}$$

と書き下せる。行列 $\left(\theta_i\left(\frac{\partial}{\partial x_j}\right)\right)_{1 \leq i, j \leq n}$ は座標近傍内で正則であるので、その逆行列を $(P_{ij}(x, a))_{1 \leq i, j \leq n}$ として、微分方程式(2)を書き直すと。

$$\begin{aligned}\frac{d(x_i \circ \hat{y})}{ds} &= \sum_j P_{ij}(x \circ \hat{y}, a \circ \hat{y}) \xi_j, \\ \frac{d(a_{ij} \circ \hat{y})}{ds} &= -\sum_{k,l} \omega_{ij}\left(\frac{\partial}{\partial x_k}\right) P_{kl}(x \circ \hat{y}, a \circ \hat{y}) \xi_l\end{aligned}$$

となる。すなわち、微分方程式(2)を解くことは、関数 $f = (x, a) : [0, 1] \rightarrow \phi(U) \subset \mathbb{R}^n \times \mathfrak{o}(n)$ を未知関数として、微分方程式

$$x'_i = \sum_j P_{ij}(x, a) \xi_j, \tag{3}$$

$$a'_{ij} = \sum_{k,l} \omega_{ij}\left(\frac{\partial}{\partial x_k}\right) P_{kl}(x, a) \xi_l$$

$(x : [0, 1] \rightarrow \mathbb{R}^n, a : [0, 1] \rightarrow \mathfrak{o}(n))$ を解くことに他ならない。

関数 ξ が区間 $[0, 1]$ 上 L^2 級であるとき、(3)の初期値問題の解 $f = (x, a)$ が H^1 級として一意に存在すること、関数 $f = (x, a)$ は C^0 級になることが、標準的な議論で示される。

この定理より、起点 $x_0 \in M$ を固定するとき、接ベクトルが2乗可積分である曲線の空間が次の様に定義できる。

定義1.

$$H^1([0, 1], M, x_0) = \left\{ \pi \circ \hat{y} \mid \hat{y} : [0, 1] \rightarrow O(M), \pi(\hat{y}(0)) = x_0, \omega\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) = 0, \theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n) \right\}$$

さらに、 $H^1([0, 1], M, x_0)$ は連続な曲線の空間 $C^0([0, 1], M, x_0)$ の部分空間となる。

3 H^1 曲線の変分場ベクトル

主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ の水平な H^1 級曲線 $\hat{y} : [0, 1] \rightarrow O(M)$ に対し、 L^2 級関数 ξ を

$$\xi = \theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$$

で定義する。定理2.1により H^1 級の曲線の空間 $H^1([0, 1], M, x_0)$ は、 $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n) \ni \xi \mapsto \pi \circ \hat{y}$ を「座標」として持つ。 $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ における ξ の変分に対する、リーマン多様体 (M, g) の曲線 $y = \pi \circ \hat{y}$ の挙動を調べたい。

底空間 (M, g) のリーマン曲率テンソル $R = R_{ijkl}$ を、主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ 上の $\mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n$ 値関数とみなし、 $R_{ijkl}(s) = R_{ijkl}(\hat{y}(s))$ と略記する。

Y を水平な曲線 \hat{y} に沿った主 $SO(n)$ 束 $O(M)$ のベクトル場とする。Levi-Civita接続において歪率は0であるので、

$$2d\theta_i\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \sum_j \omega_{ij}(Y) \theta_j\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) = \sum_j \omega_{ij}(Y) \xi_j, \quad (4)$$

$$2d\omega_{ij}\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \sum_{k,l} R_{ijkl} \theta_k\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) \theta_l(Y) = \sum_{k,l} R_{ijkl} \xi_k \theta_l(Y)$$

である。

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ と $O(M)$ の曲線 \hat{y} の変分の間には次の関係が成立する。

命題3.1. ξ の変分を η とするとき、 $O(M)$ の曲線 \hat{y} の η に対応する変分 Y は、初期条件 $\theta(Y) = 0$ 、 $\omega(Y) = 0$ の下で、微分方程式

$$\theta_i(Y)' = \eta_i + \sum_j \omega_{ij}(Y) \xi_j, \quad (5)$$

$$\omega_{ij}(Y)' = \sum_{k,l} R_{ijkl} \xi_k \theta_l(Y)$$

の解である。

証明. 曲線の変分 Y に対しては、 $\left[\frac{d}{ds}, Y\right] = 0$ であることに注意して、

$$2d\theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \frac{d}{ds} \theta(Y) - Y\left(\theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right)\right) = \theta(Y)' - \eta,$$

$$2d\omega\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \frac{d}{ds} \omega(Y) - Y\left(\omega\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right)\right) = \omega(Y)'$$

なので、(4)から、命題を得る。

(5)から、 $t \in [0, 1]$ に対し、

$$\int_0^t \eta_i(s) ds = \theta_i(Y)(t) - \sum_{j,k,l} \int_0^t \xi_j(t_2) \int_0^{t_2} R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \theta_l(Y)(t_1) dt_1 dt_2 \quad (6)$$

$$\eta_i(t) = \theta_i(Y)'(t) - \sum_{j,k,l} \xi_j(t) \int_0^t R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \int_0^{t_1} \theta_l(Y)'(t_2) dt_2 dt_1$$

となる。

定義2. 区間 $[0, 1]$ で定義された \mathbb{R}^n に値を持つ関数 f に対し、作用素 Z 、 W を、

$$Zf_i(t) = \sum_{j,k,l} \int_0^t \xi_j(t_2) \int_0^{t_2} R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) f_l(t_1) dt_1 dt_2$$

$$Wf_i(t) = \sum_{j,k,l} \xi_j(t) \int_0^t R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \int_0^{t_1} f_l(t_2) dt_2 dt_1$$

で定義する。

(6)を作用素 Z 、 W を用いて書き直すと、

$$\int_0^t \eta(s) ds = \theta(Y)(t) - Z(\theta(Y))(t) = (1 - Z)(\theta(Y))(t) \quad (7)$$

$$\eta(t) = \theta(Y)'(t) - W(\theta(Y)')(t) = (1 - W)(\theta(Y)')(t) \quad (8)$$

である。

$|\cdot|$ をユークリッド空間の標準的なノルムとする。

$$\int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| dt_1 dt_2 = \frac{1}{2} \left(\int_0^t |\xi(t_1)| dt_1 \right)^2$$

であるので、次の評価を得る。

命題3.2. 区間 $[0, 1]$ 上のベクトル値関数 f 、 R と、 $t \in [0, 1]$ に対し、

$$F(t) = \max \{ |f(s)| \mid s \in [0, t] \},$$

$$K(t) = \max \{ |R(s)| \mid s \in [0, t] \}$$

とするとき、不等式

$$|Zf(t)| \leq \frac{K(t)}{2} \left(\int_0^t |\xi(t_1)| dt_1 \right)^2 \cdot F(t)$$

が成立する。

作用素 Z の中 Z^m について考察しよう。

命題3.3. $m \in \mathbb{N}$ とする。 $t \in [0, 1]$ において、不等式

$$|Z^m f(t)| \leq \frac{K(t)^m}{(2m)!} \left(\int_0^t |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m} \cdot F(t) \tag{9}$$

が成立する。

証明. (9) が成立しているとして、

$$\begin{aligned} |Z^{m+1} f(t)| &\leq K(t) \int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| |Z^m f(t_1)| dt_1 dt_2 \\ &\leq \frac{K(t)^{m+1}}{(2m)!} \int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| \left(\int_0^{t_1} |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m} dt_1 dt_2 \cdot F(t) \\ &= \frac{K(t)^{m+1}}{(2m+1)!} \int_0^t |\xi(t_2)| \left(\int_0^{t_1} |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m+1} dt_2 \cdot F(t) \\ &= \frac{K(t)^{m+1}}{(2m+2)!} \left(\int_0^t |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m+2} \cdot F(t) \end{aligned}$$

から、帰納法により命題3.3が示される。

系3.4. 区間 $[0, 1]$ で定義された C^0 級関数 f に対し、無限級数 $\sum_{m=0}^{\infty} \|Z^m f\|_C$ は収束する。作用素の級数

$$\sum_{m=0}^{\infty} Z^m$$

は C^0 強位相で絶対収束し、

$$(1 - Z)^{-1} = \sum_{m=0}^{\infty} Z^m = 1 + Z + Z^2 + \dots$$

が成立する。

同様に作用素の級数

$$\sum_{m=0}^{\infty} W^m$$

は L^2 強位相で絶対収束し、

$$(1 - W)^{-1} = \sum_{m=0}^{\infty} W^m = 1 + W + W^2 + \dots$$

が成立する。

系 3.4 と (7) から次の命題を得る。

命題 3.5. 区間 $[0, 1]$ 上の \mathbb{R}^n 値関数 H を $H(t) = \int_0^t \eta(s) ds$ とするとき、

$$\theta(Y)(t) = ((1 - Z)^{-1}H)(t)$$

であり、

$$|\theta(Y)(t)| \leq \cosh\left(\sqrt{K(t)} \int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right) \cdot \int_0^t |\eta(s)| ds$$

の評価が成立する。

証明. $\max\{|H(s)| | s \in [0, t]\} \leq \int_0^t |\eta(s)| ds$ と、

$$\sum_{m=0}^{\infty} \frac{K(t)^m}{(2m)!} \left(\int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right)^{2m} = \cosh\left(\sqrt{K(t)} \int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right)$$

から命題 3.5 は従う。

4 経路空間 H^1 におけるベクトル場

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ から、定義 1 から定まる M の曲線を $\gamma = \pi \circ \hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow M$ とし、 M 上の関数 f に対する経路積分

$$\int f(\gamma(1)) e^{-F(\xi)} D\xi$$

を考える。定理 2.1 によって定まる曲線 $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$ の変分 Y について、経路積分の変分は、

$$\int df(\pi Y) e^{-F(\xi)} D\xi = \sum_i \int \nabla_i f \theta_i(Y) e^{-F(\xi)} D\xi$$

となると考えられる。被積分関数において、 $df(\pi Y)$ は γ の終点 $\gamma(1)$ における値であり、 $\nabla_i f \theta_i(Y)$ は $\hat{\gamma}$ の終点 $\hat{\gamma}(1)$ における値である。

ヒルベルト空間 $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ の完全正規直交系 $\{\phi_\alpha\}$ を固定し、

$$\xi = \sum_\alpha \int \xi_\alpha \phi_\alpha \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$$

ついて、定理 (2.1) によって定まる曲線 $\hat{\gamma}$ のパラメータ ξ_α に対する変分を $\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha}$ で表す。(8) から、

$$\theta\left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha}\right)' = (1 - W)^{-1} \phi_\alpha$$

となる。

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$ の関数 $F(\xi)$ の勾配ベクトル場 $\left\{\frac{\partial F}{\partial \xi_\alpha}\right\}$ から構成される $\hat{\gamma}$ の変分

$$Y = \sum_{\alpha} \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} Y_{\alpha}$$

について、部分積分、

$$\sum_{\alpha, i} \int \nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha}) \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} e^{-F(\xi)} D\xi = \sum_{\alpha, i} \int \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} (\nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha})) e^{-F(\xi)} D\xi \quad (10)$$

が可能であるとして、 (M, g) の Laplace-Beltrami 作用素 Δ との関連を考える。

$$\sum_{\alpha, i} \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha})) = \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i^2 f \theta_i(Y_{\alpha}) \theta_j \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) + \sum_{\alpha, i} \nabla_i f \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\theta_i(Y_{\alpha})) + \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i f \omega_{ij} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) \quad (11)$$

(\cdot) はユークリッド空間 \mathbb{R}^n の標準的な内積であり、 $\{e_i\}$ はその内積に関する正規直交基底とする。 $\xi_j = (e_j, \xi)$ から、 $\frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_{\alpha}} = (e_j, \phi_{\alpha})$ とする。

(11)の最初の和に関し、

$$\theta_j \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) = \int_0^1 (e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha}) dt = \langle e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha} \rangle$$

から、

$$\theta_i(Y_{\alpha}) = \langle e_i, (1-W^*) \phi_{\alpha} \rangle = \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \quad (12)$$

となるように、 $\hat{\gamma}$ の変分の族 $\{Y_{\alpha}\}$ を選ぶ。このとき、(11)の最初の和は、

$$\begin{aligned} \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i^2 f \theta_i \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) &= \sum_{\alpha, i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \langle e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha} \rangle \\ &= \sum_{i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \langle e_j, (1-W)^{-1} (1-W) e_i \rangle \\ &= \sum_{i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle e_j, e_i \rangle \\ &= -\Delta f \end{aligned}$$

を得る。

(12)の $\{Y_{\alpha}\}$ に対し、(11)の最後の和は、

$$\omega_{ij} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) = \sum_{k, l} \xi_k R_{klj} \theta_l \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right)$$

から、

$$\begin{aligned} \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i f \omega_{ij} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) &= \sum_{\alpha, i, j, k, l} \nabla_i f \int_0^1 \xi_k R_{klj} \int_0^1 (e_l, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha}) dt_1 dt \cdot \langle (1-W) e_j, \phi_{\alpha} \rangle \\ &= \sum_{i, j, k, l} \nabla_i f \int_0^1 \xi_k R_{klj} \int_0^1 (e_l, e_j) dt_1 dt \\ &= \sum_{i, j} \nabla_i f \int_0^1 t \xi_j \text{Ric}_{ij} dt \end{aligned}$$

である。

(11)の第2の和の $\sum_{\alpha} \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\theta(Y_{\alpha}))$ について、リーマンテンソルの反対称性と、

$$\langle W e_i, \phi_{\alpha} \rangle = \int_0^1 (W e_i, \phi_{\alpha}) dt = - \sum_{j, k, l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_{\alpha}} \xi_k \int_0^1 t_j \xi_j R_{ijkl} dt_1 dt$$

および、

$$\sum_{k,l} \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \frac{\partial \xi_k}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl} = 0$$

から、

$$\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} (\theta_i(Y_\alpha)) = \sum_{j,k,l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl} dt_1 dt + \sum_{j,k,l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha} dt_1 dt \quad (13)$$

である。

リーマンテンソル R に対し $\frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha}$ は、

$$\begin{aligned} \frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha} = & \sum_m \theta_m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) \nabla_m R_{ijkl} + \sum_m \omega_{mi} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{mjkl} \\ & + \sum_m \omega_{mj} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{imkl} \\ & + \sum_m \omega_{mk} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijml} \\ & + \sum_m \omega_{ml} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijkm} \end{aligned}$$

であり、Levi-Civita接続においては、歪率は0であるので、

$$\sum_j \xi_j \omega_{mj} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) = \theta_m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' - \frac{\partial \xi_m}{\partial \xi_\alpha}$$

および、

$$\sum_{j,m} \xi_j \omega_{mj} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{imkl} = \sum_m \theta_m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' R_{imkl} - \sum_j \frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl}$$

を(13)に適用して、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} (\theta_i(Y_\alpha)) = & \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \theta_m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' \nabla_m R_{ijkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \theta_m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' R_{imkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{mi} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{mjkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{mk} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijml} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{ml} \left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijkm} dt_1 dt \end{aligned}$$

を得る。

参考文献

- [1] 藤原 大輔、ファイマン経路積分の数学的方法、シュプリンガー・フェアラーク東京、(1999)
- [2] T. Hiroshima, *A Thought about Feynman Path Integral on Riemannian Manifold*, NUCB Journal of Economics and Information Science Vol. 55 No. 2, (2011) 219–225.

- [3] T. Hiroshima, *Path Space and Laplace-Beltrami Operator on Riemannian Manifold*, NUCB Journal of Economics and Information Science Vol. **56** No. **2**, (2012) 131-138.